

古文と文獻について

はじめに

萩庭 勇

古文字の研究は、その嚆矢は言うまでもなく後漢の説文解字（以下説文という）に始まると言つて好いと想う。説文は所謂金科玉條そのものである。が宋代の金文、加えて今から大約百年前の清朝光緒二十四乃至五年（一八九八〜一八九九）ごろ、河南省安陽県（小屯）付近から契文が發現されるや、その解明と共に亦研究も飛躍的に發展を遂げたのである。がここでいささか述べようとするのは、その視點についてである。つまりまるところ文字そのものの解明の視點、それともその後連なる文獻に連繫させる視點についてである。

一、「車」字と「古制」について、

前者の視點であれば、「車」字の古形について、先賢・先達兩位の説解を提示すると、

加藤常賢著「漢字の起原」車字下に



字形

契文は車の全体象形であり、金文の第二字と篆文とは車輪一箇の省略形である。

字音

釈名に

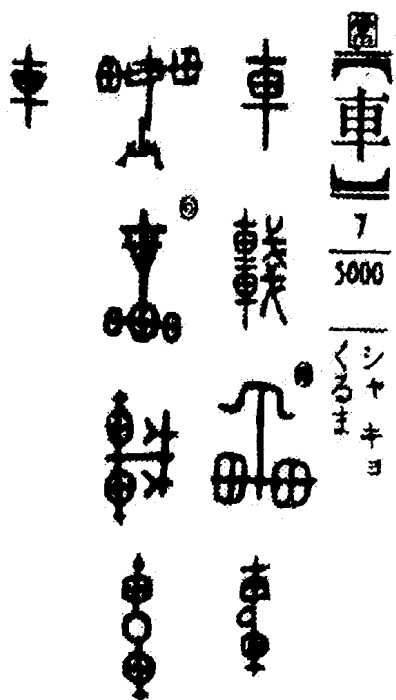
古は車を曰ふの声は居の如し、行くに人を居く^お所以なるを言ふなり、今は車を曰ふの声は舍に近し。行く者の処^おる所の舍なり。

と言うごとく、古音は「居^{まよ}」であり、今音は「舍^{しゃ}」に近いのである。

字義

行くに居する所の意である。車の坐居する所の名が、車全体の呼称となった。

白川静著「字通」車字下に



象形 車の形に象る。籀文ちゆうぶんの字形には、轅えんを加えている。「説文」十四上に「輿輪いんりんの聽名なり」とあり、

車の全体をいう。殷墟をはじめ古代の古墳から車馬坑の類が多く出土しており、古代の車制を知ることができさる。

①くるま、くるまのわ、くるまのこし。②輪の形で回転するもの、水車など。③古音は居、居の義に用いることがある。

とあつて完全不闕そのもので、一言も必要としないが如きである。が「古文から文献へ」と視点を變えて見ると、管見ながら嘗て前人の言わざることが眼前に現出するが如きである。

つまるところ前者の視点では、「車」字の第二字（後者第五字）契文の「分岐の二線」の何たるかを了解することは困難である。因みに前引の兩巨人の「車」字には、「分岐の二線」について片言の指摘も無いことは興味あることである。或いは共通する意識のなせることか？さてこの「分岐の二線」を了解するには後者の視点が必須であると估計する。これを了解するには『周禮』考工記の「車制」を参考すると氷解するのである。考工記によれば、古代の「車」には「大車」と「小車」が存在したのである。大車とは、貨物用の「車」である。小車とは、人間用の「車」である。両者はどこに相異があるかと言えば、それは長柄（轅）にあるのである。大車はその轅は車輪の中心（軸）より前出して軾（車の前部の横木）を出て直進する（構造）。が小車は軸より前出して軾を通過するや灣曲して上昇するのである。上昇して軛（くびき。牛馬の頸に當てる）に連結するの




である。この曲線こそ緩衝そのものなのである。前掲の「車」字の「分岐の二線」はそれを説いて餘りあると比定するのである。

二、「車」字と「文献」について

唐の詩人杜牧の名作「山行」の「遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花」中の「車」字は、大多数の先賢が文字通り「くるま」として見て取り、その他の言辭を使用したや未見である。つまるところこの視點では、前引の二巨著（漢字の起原・字通）の説解で事足りるのである。顧念するに唐代にあつて果たして譬如「峨峨乎泰山」に所謂「くるま」は上り得たであろうか？些か疑問である。そこで管見に依れば参考になるのは以下の言辭である。『史記』列傳（孟子）に曰「孟軻驕人也」とある脚注に「趙氏曰孟子魯公族孟孫之後。漢書注云字子車。一説字子輿」とある「漢書注」以下は、あたかも百万力を得たる感を否めない。それは何故かと言えば、古代の中國では「本名と表字」兩者の關係にかかるからである。その關係とは「名と字とは本來は同義、若しくは近似義」であることに外ならないからである。ここでは言うまでもなく「軻」と「子車」とは同義である。更には「一説子輿」の「子輿」は、「子車」に比して「軻」字により密接不離の關係にあると比定する。それは前者の「字子車」より後者の「一説云々」の方が「孟軻」、つまり「孟子」の形貌をよりよく表出していることになるからである。言うまでもなく「子車」「子輿」の子字は所謂男子の美称であるからして、直接的にその意義にかかるとは言えないことは言うまでもない。（管見では、「子」字は本來

は前述のような男子の美稱ではないと考えているが場所を換えて記述することとする。これを要するに、前述の「軻」即「車」、「車」即「輿」、「輿」は「車」に比し、更に「軻」に近し、これが是となれば、これを前掲の「山行」の「停車」に重ねると「停車」は「停輿」となる。従ってこの「輿」字に雅なる言辭を賦与すると「こし」となる。が俗なる言辭を賦与すると「かご」となる。これからは想像の域を出ない嫌いあるも敢えて言えば、唐代の文人墨客たちは自力歩行のみならず、所謂強力の幫助を借りて行樂に興じたと估計するのである。そこで前述のように古文の考覈は、「古文の古形の考究に止まらず、その視点を文献にまで連繫させることにより、その結果として茲で言えば、「車」字を「輿」字に投影することを可能ならしめるのである。

おわりに

以上拙説を述べたが、古文の研究に於いては、横（断代）の視點、それとも縦（連繫）の視點、どちらに歸依すべきか明白である。先賢は、「」を「非虜」に比定し、『尚書』の立政篇に連繫させている【加藤常賢・中国古代文化の研究 】ことを明示する。尚、「」は金文に多見することを附記する。